

〈研究主題〉

自ら気付き考え実行する児童の育成

～総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを通して～

屋久島町立神山小学校 教諭 上園 弘太郎

目次

1	はじめに	2
2	研究テーマについて	2
	(1) 「自ら気付き考え実行する児童」とは	
	(2) 「自ら気付き考え実行する児童」の育成と「総合的な学習の時間」の関係	
	(3) 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント	
3	研究の内容と実際	4
	(1) 目指す児童像の具体化	
	(2) 探究課題の設定	
	(3) 育成する資質・能力の設定	
	(4) ESDカレンダーの作成	
	(5) 単元計画	
4	成果と課題	9
5	今後の取組	10

〔参考・引用文献等〕

- ・ 第2期教育振興基本計画(2013)
- ・ 小学校学習指導要領解説総則編(2017)
- ・ 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編(2017)
- ・ 小学校学習指導要領解説 特別活動編(2017)
- ・ 田村学「深い学びを実現するカリキュラム・マネジメント」(2019)
- ・ 浅野良一「学校の内外環境の分析と特色づくり」(2021)

1 はじめに

本校は屋久島町南東に位置する児童数 84 名の学校である。チャレンジ精神の高い児童が多く、水泳記録会、陸上記録会、図画作品展等、多くの分野で入賞し活躍している。また、学力面では、表 1 から、各調査・検査において県や全国の平均を上回っていることが分かる。

【表 1 学力調査・検査における本校児童の実態】

調査・検査名	県・全国との比較
全国学力学習状況調査 (H29～R 2 6 年生)	+ 3. 8
鹿児島定着度調査 (H29～R 2 5 年生)	+ 6. 7
CRT 学力検査 (R 2 1～6 年生)	+10. 8

一方で、本校児童の課題として「テストの点数は良いが、学びが生活につながっていない。」「学校生活において、自ら気づき、考え、実行するといった主体的な活動があまり見られない。」ことが挙げられる。原因として、「教科で身に付けた資質・能力が他の教科、総合的な学習の時間、特別活動、行事においてどのように活用・発揮されるか見えにくいカリキュラムになっていること」が考えられる。

また、グローバル化、人工知能の発達、産業空洞化、生産年齢人口減少等、パラダイム転換の機を迎え「予測困難な時代」に差し掛かる昨今において社会を構成するすべてのものが当事者として危機感を共有し、自ら課題探究に取り組むなどそれぞれの現場で行動することが求められる（第 2 期教育振興基本計画より）。

以上のような児童の実態、社会からの要請を受け、一人一人の児童が様々な課題に当事者意識をもって探究的に取り組む資質・能力を育成していくことが必要であると考えられる。

そこで、本研究では、これまでの本校のカリキュラムを見つめ直し、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを行い、教科で身に付けた資質・能力が活用・発揮される場を設定することで「自ら気づき考え実行する児童」の育成を目指す。

2 研究テーマについて

(1) 「自ら気づき考え実行する児童」とは

本校児童の実態、社会の背景を踏まえ、「自ら気づき考え実行する児童」を以下のように定義する。

身に付けた資質・能力を教科等横断的に活用・発揮して、社会の様々な課題に自ら気づき自分事と捉え、他者と協働しながら解決方法を考え解決に向けて粘り強く取り組むことを通して、生活や自己の生き方を高め続けることができる児童

(2) 「自ら気づき考え実行する児童」の育成と「総合的な学習の時間」の関係

本研究では、「自ら気づき考え実行する児童」の育成を目指すために、「総合的な学習の時間」に焦点を当てている。本節では、「自ら気づき考え実行する児童」の育成に「総合的な学習の時間」がどのようにつながるか、その特性を見ながら示していく。

まず、算数科、国語科等といった教科は、働かせる見方・考え方や学習対象となる内容がその教科固有のものであるといった性質上、身に付けた資質・能力を教科等横断的に活用・発揮することが難しい。「教科等横断的な活用・発揮」と親和性が高い領域として、考えられるのは、特別活動、総合的な学習の時間である。

この二つの領域に関して、「学習指導要領解説 特別活動編」では、「各教科等で身に付けた資質・能力を総合的に活用しながら、児童が自ら現実の課題の解決に取り組むことを基本原理としている点」、「体験的な学習や協働的な学習を重視している点」、「自己の生き方についての考えを深める点」が共通項とされている。一方で、両者の違いについて、特別活動の本質を「実践」、総合的な学習の本質を「探究」とした上で

「特別活動における『解決』は、実生活における、現実の問題そのものを改善することである。総合的な学習の時間における『解決』は、一つの疑問が解決されることにより、さらに新たな問いが生まれ、物事の本質に向けて問い続けていくものである。」と示されている。

また、「学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」において、目標について以下のように示されている。

第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

「探究的な見方・考え方を働かせる」とは、「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける」ことであると記述されている。

以上を踏まえ、「現実の問題そのものの解決を目指す特別活動」を踏まえつつ、「連続した問いを探究することを重視し物事の本質や自己の生き方を問い続けることを目指す総合的な学習の時間」の方が、本校が目指す児童像につながるものとする。

(3) 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント

本節では、カリキュラム・マネジメントを行う必要性と、総合的な学習の時間を核とすることの意義について示していく。

「学習指導要領解説 総則編」において、カリキュラム・マネジメントについて、以下に示す3点を通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことと定義している。

- ① 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

このように、カリキュラム・マネジメントは、「目標」「実態」「内容」を教科等横断的な視点でつなげていくことであり、更にその評価・改善を行うことで教育活動の質の向上を促すものである。このことにより、学校教育全体を通して、「自ら気付き考え実行する児童」の育成が図られるものとする。

また、「学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」では、カリキュラム・マネジメントにおける総合的な学習の時間の位置付けについて、以下のように示されている。

学校の教育目標を教育課程に反映し具現化していくに当たっては、これまで以上に総合的な学習の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに、各教科等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うことが求められる。したがって、総合的な学習の時間が実効性のあるものとして実施されるためには、地域や学校、児童の実態や特性を踏まえ、各教科等を視野に入れた全体計画及び年間指導計画を作成することが求められる。

以上を踏まえ、本研究では、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを行い、「自ら気付き考え実行する児童」の育成を目指していく。

3 研究の内容と実際

総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントの具体的な進め方について、田村氏「深い学びを実現するカリキュラム・マネジメント」を参考にし、前年度までの本校の教育課程の実態を踏まえ、表2のように設定する。

【表2 カリキュラム・マネジメントの進め方】

カリキュラム・マネジメントの進め方	留意点
① 目指す児童像の具体化	学校教育目標，児童の実態，社会の背景を基に資質・能力3つの柱で整理し，具体的な児童像を描く。
② 探究課題の設定	学校全体としての軸を決め，中学校まで連続性のある探究課題を設定する。
③ 育成を目指す資質・能力の設定	「目指す児童像」「各教科等で身に付けた資質・能力」「学習の基盤となる資質・能力」との関連を図り設定する。
④ ESD カレンダーの作成	各教科等で身に付けた資質・能力の活用・発揮が見えるようにする。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」同土をつなぐ。
⑤ 単元計画の作成	育成を目指す資質・能力を明らかにし，単元構想を行う。外部人材を記載する。体験活動を重視する。

(1) 目指す児童像の具体化

どのような児童を育てていくか考える際に、「学習指導要領に示される資質・能力の3つの柱」，「学校の特色や実態に即して設定されている学校教育目標」が拠り所となる。第2章で示した「自ら気付き考え実行する児童」をこの2つの視点で整理し，育成を目指す児童の姿の具体化を図り全職員で共有することで，目指す方向性を共有し，授業における教師の手立てと結び付きやすいようにした。（図1）

【図1 自ら気付き考え実行する児童の姿の具体化】



(2) 探究課題の設定

探究課題について、「学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」において、「現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」「地域や学校の特色に応じた課題」「児童の興味・関心に基づく課題」といった視点から，探究的な学びが実現するような探究課題を設定していくことが重要であると示されている。

前年度までの本校の教育課程は，各学年の探究課題が5つの領域に渡っていたことから，1単元あたりの配当時数が少なくなり，学習が体験活動の域に留まっていた。また，単元間のつながりも薄く活動が教師から与えられたものになっていた。その結果，探究的な学びとなっていないというカリキュラム上の課題があった。

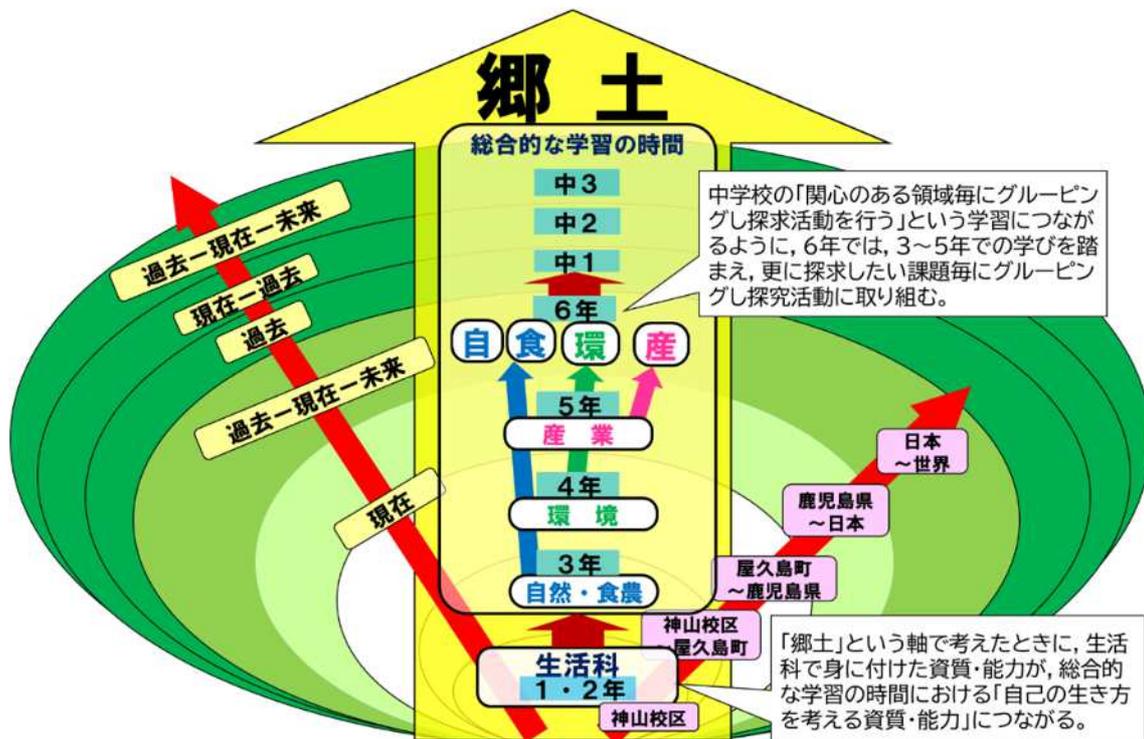
探究的な学びの実現を図るために，本校の特色を生かした総合的な学習の時間の軸を設定する必要がある。学校の特色について，浅野氏「学校の内外環境の分析と特色づくり」を参考にし，学校の環境を「機会」，「脅威」からなる外部環境と「強み」，「弱み」からなる内部環境の軸で分析する，SWOT分析を行い表3に整理した。

【表3 本校における内外環境分析】

外部環境	内部環境
<p>【機会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界自然遺産を始めとする豊かな自然に囲まれている。 学校教育に協力的な保護者・地域の風土がある。 本校保護者にESDグローバルアドバイザーを有している。 農業、産業、漁業、観光業等、様々な産業があり従事している保護者がいる。 身近に複数の福祉施設がある。 持続可能な社会づくりへ意識をもたせやすい。 <p>【脅威】</p> <ul style="list-style-type: none"> コロナ禍により、地域との交流の機会が減少している。 多様な考えの保護者がおり方向性の共有が難しい。 	<p>【強み】</p> <ul style="list-style-type: none"> 明るく素直な児童が多く、ほとんどの児童がお互いの名前を知っており温かい雰囲気のある学校づくりにつながっている。 児童数が少ないため、一人一人に活躍の場を与えやすい。 島内における多くの学校で児童数が減少している中、年々児童数が微増している。 <p>【弱み】</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童数が少ないため、多様な考えに触れにくい。 多人数の場や普段と異なる場になれて織らず、学校外の発表等で力を発揮できない児童が多い。

分析を踏まえ、地域の有する自然、産業、人といった豊富なりソースを生かし、地域の課題を解決していく活動を設定していくことが可能であり、更にそのことが「自ら気づき考え実行する児童」の育成につながると考え、本校における総合的な学習の時間の軸を「郷土」と設定する。さらに、共通テーマを「生かそう！屋久島のみりよく 創ろう！わたしたちの未来」とすることで学習者である児童とビジョンの共有を図る。探究課題については、各教科、行事等と関連付けながら1つに絞り、年間を通じて探究的な学びが実現するよう改善を図る。また、進学先の中学校では、関心のある分野ごとにグループを作り探究学習を行っているという実態を受け、6年生では、3～5年生で学んだ学習を基に、さらに深めたい内容毎にグループを作り探究学習に取り組むようにすることで、小学校～中学校間における接続を図っていく。(図2)

【図2 ESDとの関連を図った総合的な学習の時間全体イメージ図】



(3) 育成する資質・能力の設定

前節で設定した探究課題を通して育成を目指す資質・能力について示していく。

まず、育成を目指す資質・能力について、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力から成る「① 学習の基盤となる資質・能力」と、国立教育政策研究所の示す「② ESDで育成を目指す資質・能力」を3つの柱の視点で表4のように整理する。

【表4 総合的な学習の時間に育成を目指す資質・能力】

知識 技能	多様性 相互性 有限性 公平性 連携性 責任性 比較・分類・関連付け
思考力 判断力 表現力等	論理的思考力 プレゼンテーション力 批判的に思考し、判断する力 未来像を予測して計画を立てる力 多面的、総合的に考える力 コミュニケーションを行う力
学びに向かう力 人間性等	社会参画力 意志決定力 他者と協力する態度 つながりを尊重する態度 責任を重んじる態度

その際に、表5に示す点に留意する。

【表5 育成する資質・能力設定の際の留意点】

資質・能力	留意点
知識	各教科等で身に付けた知識が結合され、より一般的な概念的な知識が形成されるようにする。
技能	各教科等で身に付けた技能が何度も活用・発揮されることで自在に活用できる技能として身に付くようにする。
思考力・判断力・表現力等	「①課題の設定」「②情報の収集」「③整理・分析」「④まとめ・表現」の過程において育成されるようにする。
学びに向かう力・人間性等	「自分自身に関すること」「他者や社会との関わりに関すること」の両者を踏まえる。

さらに、第1節図1で示した「自ら気づき考え実行する児童」との関連を図り、以下のように育成を目指す資質・能力を設定する。ここでは、担当する第3学年を例として表6に示す。

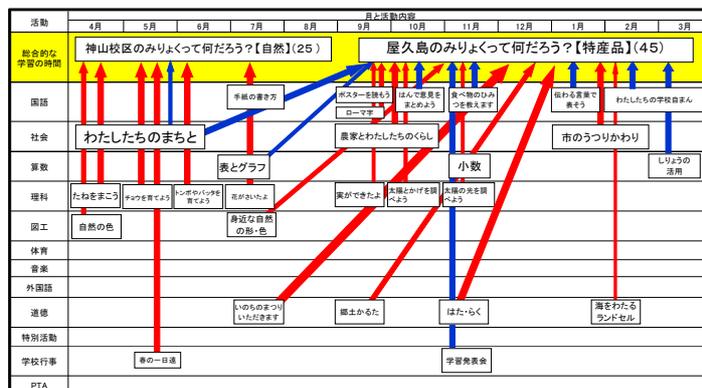
【表6 育成する資質・能力(第3学年)】

知識	<ul style="list-style-type: none"> 生物は、色、形、大きさ等に違いがあり、生育の環境がことなることを理解している。(多様性) 身近な自然において、生物はその周辺の環境と関わって生きていることを理解している。(相互性) 自然環境は、様々な要因で常に変化する可能性があり、一定では無いことを理解している。(有限性) 	
技能	<ul style="list-style-type: none"> 情報を比較・分類する等、探究の過程に応じた技能を身に付けている。 	
思考力・判断力・表現力等	【課題の設定】	<ul style="list-style-type: none"> 自分の関心や人々の思いをふまえて課題を設定し、解決方法を考えて追究している。
	【情報の収集】	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じた対象を決め、教師の支援により手段を選択し、情報を収集している。
	【整理・分析】	<ul style="list-style-type: none"> 問題状況における事実や関係を、事象を比較したり分類したり、数量などで客観的に比較したりして、特徴を見付けている。
	【まとめ表現】	<ul style="list-style-type: none"> 相手に応じて分かりやすくまとめ、筋道立てて表現している。
	【振り返り】	<ul style="list-style-type: none"> 学習したことや学習の仕方を振り返り、学習や生活に生かそうとしている。
学びに向かう力・人間性等	自分自身に関すること	<ul style="list-style-type: none"> 課題の解決に向け、目的意識をもって意欲的に取り組んでいる。 自分のよさや自分のできることに気づき、課題解決に向けて取り組んでいる。
	他者や社会との関わりに関すること	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決に向けて、身近な人と力を合わせて探究活動に取り組んでいる。 自分と異なる意見や考えがあることに気づき、相手の立場を理解する。 自分と地域・社会とのつながりに気づき、進んで課題解決に取り組んでいる。

(4) ESDカレンダーの作成

各教科で身に付けた資質・能力が活用・発揮され、更に高次の資質・能力へと発展する場面が年間通じてカリキュラム上で実現するよう、ESDカレンダーを作成し視覚化を図る。第3学年において図3のようにESDカレンダーを作成した。知識・技能を赤矢印で思考力・判断力・表現力を青矢印でつなぎ資質・能力同士の間が分かるようにした。

【図3 ESDカレンダー(第3学年)】



(5) 単元計画

今年度の第3学年における実践を基に、次年度の単元計画を作成した。今年度の実践は以下のとおりである。

ア 探究課題

屋久島の自然や、特産物であるタンカンの魅力、その保全、普及、生産に携わる人々の願いや思いと、それを実現しようとする意義

イ 単元名

知らせたい！屋久島の自然・タンカンの「見力」「美力」「味力」

ウ 単元の目標

神山校区・屋久島の自然やタンカンの特色に関する探究的な活動を通して、その魅力や観光業、農業に従事する人々の願いや思いを知ると共に、目の前の課題を自分事として捉え、友達や地域の方等の他者と協働しながら、課題解決に向けて取り組もうとすることができる。

※ 育成を目指す資質・能力の具体については、表6に示しているとおりである。

エ 授業の実際

単元名を「知らせたい！屋久島の自然・タンカンの『見力』『美力』『味力』」と設定している。児童が「知らせたい！」という意欲をもち探究活動に意欲的に取り組むことができるよう、知らせる対象を設定することが有効であると考えた。「学校外の相手に対して緊張してしまい上手く伝えることができない。」という児童の実態を踏まえ、目指す児童像の中で「どのような場面でも筋道立てて考え表現できる児童」「誰に対しても自分の思いを伝えることのできる児童」を重点的に育成することを目指し、年間通じて中種子町立増田小学校3・4年生とのオンライン交流学习を行うことにした。小単元毎に実践の概要を示していく。

(ア) 小単元1「神山校区のみりょくって何だろう？（自然）」

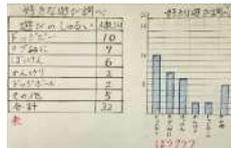
a オンライン交流学习

第1回目の交流学习では、休み時間に簡単な挨拶を行い、これから1年間交流学习をしていくことを確認した。交流後、聞いてみたいこと、知りたいことについてアンケートを行った。アンケートの内容は、学校の場所、人数、見える景色、人気の遊び等、自分たちの学校生活に関わるもの、おすすめの果物、屋久島の自然等、地域の特色に関するものが挙げられた。「学校のことは調べればすぐに分かるが、果物や自然については自分たちも知らない。」ということに気付き、これからの学習への意欲付けができた。学校生活に関する内容については、第2回目の交流学习で「学校紹介」という形で伝え合った。算数科「表とグラフ」の学習を生かし、本校の児童数、3年生で人気の遊びを表や棒グラフにまとめる姿や、社会科「わたしたちの住むまち」の学習を生かし、学校から見える景色を方位毎にまとめる姿が見られた。

中種子町立増田小学校とオンライン交流（総合的な学習の時間）



好きな遊びランキング



b 秋の一日遠足

秋の一日遠足で屋久島自然館、環境文化村センターに見学に行き、屋久島の自然について学習を行った。学習を通して、以下のような姿が見られた。

算数科「長さ」の学習と関連付けて、
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「本物の縄文杉を巻き尺で測ってみたい！」とつぶやく児童 ・ 宮之浦岳の標高が 1936mと知り、算数科で歩いた 1 kmよりを縦にした高さよりも高いことに驚く児童 ・ 冬の積雪が 2～3 mになることを知り、「教室（の高さ）と同じぐらいなんだ！」とつぶやく児童
理科の学習で植物を育てた経験と比較し、
<ul style="list-style-type: none"> ・ 縄文杉が 7200 年生きること、周囲が 16m以上になること、気温の違いによって異なる植物が育つことに驚く児童（多様性についての概念形成）

c 校区の自然観察

本校保護者であるガイドの案内の下、学校敷地内、近隣の公園の自然の植物や昆虫の観察を行った。観察やガイドへの質問を通して、以下のような姿が見られた。

算数科「小数」の学習と関連付けて、
<ul style="list-style-type: none"> ・ ヒリュウシダの胞子が 0.1mmよりも小さいことに驚く児童
理科の学習で植物を育てた経験と比較し、
<ul style="list-style-type: none"> ・ 種では無く小さな粒子で繁殖する植物がいることに驚く児童（多様性についての概念形成） ・ ツマベニチョウの幼虫が食べるギョボクが減るとツマベニチョウが見られなくなってしまうことを知り生物同士の関係について理解を深める児童（相互性、有限性についての概念形成） ・ 品種改良を重ねた桜と自生している桜とでは花びらの色に違いがある理由を知り納得する児童（多様性についての概念形成） ・ 植物によって葉の形や枚数が異なることに興味をもつ児童（多様性についての概念形成） ・ 葉を落とす木と落とさない木がある理由を知り納得する児童（多様性についての概念形成）

(イ) 小単元 2 「神山校区のみりよくって何だろう？（特産品）」

社会科「農業とわたしたちの暮らし」において、タンカン作りの工夫や努力について学習を行い、タンカン畑の見学・インタビュー・芽切り体験を行っている。その後、学校でタンカン農家による授業（ふるさと先生授業）を通して、タンカン作りの工夫や努力について更に理解を深めている。

a ESD グローバルアドバイザーによる授業

タンカン作りにおける課題を広い視野で捉え、自分事として捉えられるようにするために、屋久島町の ESD グローバルアドバイザーを務める本校保護者を招き、今の世界の状況と持続可能な社会づくりの必要性について授業を実施した。地球環境が限界を迎え多くの課題に直面していること、自分たちの行動一つ一つが多くの課題解決につながることを等について国内外の様々な事例を基に知る機会となった。授業を通して、以下のような児童の姿が見られた。

授業後の感想より
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1つのゴールを達成することが他のゴールを達成することにつながるということが分かった。（相互性の概念形成） ・ 「質の高い教育をみんなに」に興味をもった。海外にランドセルを送ることに取り組んでみたい。（課題設定・振り返り） ・ 海の豊かさを守るために、ゴミ拾いに取り組んでみたい。（有限性の概念形成） ・ 給食を残すことが地球温暖化につながることを初めて知った。これからは残さないようにしたい。（相互性・有限性の概念形成）

b タンカン畑見学（2回目）

2回目の見学では、タンカンの色や大きさの変化を観察し、ヒヨドリの害から実を守るためにサンテ（布袋）を被せる体験を行った。その後、タンカン農家への質問を行った。以下のような児童の姿が見られた。

社会科「農業とわたしたちの暮らし」の学習と関連付けて、
<ul style="list-style-type: none"> ・ 贈答品として栽培されているタンカンが主なため、傷が付くと売れなくなり廃棄していることを知り、食品ロスをなくすために何か出来ることがないか考える児童（課題の設定） ・ 温暖化が進むと屋久島でタンカン栽培ができなくなる可能性があることに驚く児童（有限性についての概念形成） ・ 傷がついたタンカンの表皮の様子から、ヒヨドリや虫がタンカンを好んで食べることを知る児童（相互性についての概念形成）

c 具体的な取組について話し合い

タンカン畑見学後、課題を解決するためにどのようなことに取り組んでいきたいかについて話し合った。話し合いを通して、「農家の手伝いをする。」「食品ロスになるタンカンを使って調理をする。」という意見が挙がった。その後、出てきた意見を「できそうなこと」「やってみたいこと」の軸で整理し、最終的には調理を行うことに決定した。調理をしたいという案に決まった後も、様々な社会課題の解決と関連付ける多様な発想が見られた。

《出てきた考え》
<ul style="list-style-type: none"> ・ サンテを被せる手伝いをしたい。 ・ 木に網をかけてヒヨドリが来ないようにしたい。ヒヨドリが食べるものがなくなると可哀想だから、傷が付いているタンカンは食べられるようにしたい。 ・ 食品ロスを減らすために、傷が付いたタンカンを使ってジャムやスイーツを作りたい。作ったものは、地域の人に配ったり、繰り返し使える容器物に入れて全国に送ったりすることで、屋久島のタンカンを広めたい。食品ロスのことをまとめた資料も一緒に入れることで、SDGsのことも広めたい。バザーや移動販売をして売り上げを海外に送ったり、タンカン農家のサンテ代にしたりしたい。

以上の実践を踏まえ、地域の実態、児童の興味・関心、社会的な課題の3点を考慮し、更なる活動の充実を図れるよう改善を加え、次年度の教育課程を以下のように設定する。

3年 探究課題								
屋久島の自然や、特産物であるタンカンの魅力、その保全、普及、生産に携わる人々の願いや思いと、それを実現しようとする意義								
単元の目標								
神山校区・屋久島の自然やタンカンの特色について探究的な活動を通して、その魅力や観光業、農業に従事する人々の願いや思いを知ると共に、目の前の課題を自分事として捉え、友達や地域の方等の他者と協働しながら、課題解決に向けて取り組もうとすることができる。								
単元名								
知らせたい!屋久島の自然・タンカンの「見力」「美力」「味力」								
小単元1 25	「神山校区のみよくって何だろう?(自然)」	導入 種子島または屋久島北部の学校との交流学習(オンライン可)	課題の設定 交流学習→「自分たちも校区の特色をあまり知らないだな。」	情報の収集 ガイドの方に神山小学校敷地内の自然の魅力について話を聞く。やまこ公園で生態系保全のためにサンカラホテルが植栽樹に取り組んでいることを知る。遠足で屋久島自然館、環境文化村センターで屋久島の自然について知る。	整理・分析 収集した情報や体験活動を通して分かったことを、視点を決めて分類・整理する	まとめ・表現 ロイロノートを活用しプレゼン資料を作成し、交流先の学校に伝える。	振り返り 身の回りに素晴らしい自然があることが分かった。自然を守るための取組が身近に行われていることを知った。	課題の設定 例 A:こんなに素晴らしい自然をより多くの人に知ってもらうために、何かできないかな。 B:自然を守るために身近にできることがないかな。 →夏休みを使って自主的に取り組んだり、自由研究につなげたりする。
	「神山校区のみよくって何だろう?(特産品)」	導入 社会科の「屋久島の農業」の学習から発展させて「タンカン」に目を向けさせ、名物であるわけについて興味・関心をもたせる。	課題の設定 10月、12月のタンカン園見学、11月ふるさと先生授業等を通して、タンカンの魅力と農家の工夫、今抱えている課題について知る。	情報の収集 体験活動を通して分かったタンカンの魅力や今抱えている課題について、分類・整理する。自分たちにできることを考える。	整理・分析 これまでの取組を通して、伝えたい内容、相手、方法を分類・整理する。	課題の設定 「傷の付いたタンカンが捨てられている」→「ジャム、ゼリー作りができないか。」「地域の人にも知ってほしい。」	まとめ・表現 タンカンを使った加工品について調べ、自分たちで作れそうなレシピを選ぶ。傷ついたタンカンでも味が変わらないことを伝え消費者の意識変容を促すメッセージカード等を添える。	振り返り タンカンを使ったジャム、ゼリー等加工品を作り、地域の方に配る。(福祉施設等との連携)
小単元2 45	「神山校区のみよくって何だろう?(特産品)」	振り返り フードロスを減らす取組ができた。このことをもっと多くの人に知ってほしい。	課題の設定 「どのように伝えたらいいかな。」	情報の収集 伝える方法について調べ	整理・分析 これまでの取組を通して、伝えたい内容、相手、方法を分類・整理する。	まとめ・表現 ポスター等と呼びかけたFacebook等に投稿したり取組を発信したりする。交流先の学校に伝える。	振り返り フードロスを減らす取組を広めることができた。タンカンの魅力を広めることができた。これからは普段の生活でフードロスを減らす取組を続けていきたいな。	
	単元の振り返り(期待する姿)							
【単元の振り返り(期待する姿)】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近に自然やタンカン等、素晴らしいものがたくさんあることに気付けた。自然やタンカン作りがこれからも続いていくように色々な人が工夫していることを知れた。フードロスの問題に対して自分の力が何かを変えられることにつながることを感じるようになってきた。みんなでたくさん考えてこの活動が成功したので、みんなの力が合わさるともっとがんばれると思った。関わってくれた人にも感謝したい。たくさんの人に広めることができてよかった。等 								

4 成果と課題

本研究における成果と課題について、図1「自ら気づき考え実行する児童の姿」と照応し、以下に示す。(○成果 ●課題)

○ 活用できる知識・技能を身に付けている児童

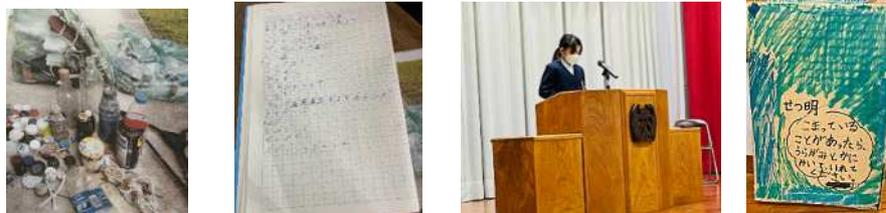
- ・ 算数科「円と球」で身に付けたコンパスによる作図の学習後、飾り付け係の児童から「学級目標『スマイル』を描きたい。」と声が挙がり、学級掲示に生かそうとする姿が見られた。



- ・ 社会科「昔の暮らしと道具」の学習において、「昔の暮らしはエコでSDGsにつながる。」という発言があり，社会科の学びを自分たちの生活に生かし，社会課題の解決につなげようとする姿が見られた。
- 誰に対しても自分の思いを伝えることのできる児童
 - ・ 外部講師による授業において，疑問を解決しようと積極的に質問する姿が多く見られた。
- 自ら課題に気付き，友達と学び合いながら課題を追究する児童
- 粘り強く向上心をもって目標を達成しようとする児童
 - ・ 元々小食の児童が多く残食が多かったが，食品ロスへの意識が高まり，これまで量を減らしていた児童が少しずつ増やすようになり残食が激減した。



- ・ 3学期の始業式の代表挨拶で，休日に自主的に海岸のゴミ拾いをを行った体験を基に，SDGsにみんなで取り組んでいくことの必要性を訴えた。さらに，学校の課題を解決しよりよい学校にしていくために「解決ボックス」を作成し，設置した。



- ・ SDGsの17のゴールの達成のために，給食時間の放送でSDGsに関するクイズを行いたいと提案があった。
- ・ 3学期の係活動を決める際に，男女に偏っていたところ，「SDGs5番のジェンダー平等につながるから，男女仲良く分かれた方が良い。」という発言があり，自分たちでよりよい係の決め方を提案した。
- 誰に対しても自分の思いを伝えることのできる児童
 - ・ 自由な発想を問われる場面では児童の挙手が多いが，正解・間違いがはっきりしている問題に対しては挙手が減る。特に，授業参観等のように保護者が見ている状況だと，間違えることを恐れる姿が見られる。
- どのような場面でも筋道立てて考え表現できる児童
 - ・ 4月の時点で挙手が少なかった児童が，自分から挙手し発表する場面が増えているが，途中で言葉が詰まり最後まで自分の考えを伝えきることができない場面があり，「筋道立てて表現する力」の育成が不十分であると感じる。

5 今後の取組

- ・ 課題を受けて，2月実施予定の増田小学校とのオンライン交流学习を活用・発揮の場の一つと設定し，国語科を中心に表現する力の育成，また学校生活全体を通して間違っても良い雰囲気醸成を行っていきたい。
- ・ 目指す児童像を学校のみならず，保護者・地域と共有することで，更に高い教育効果が期待できる。PTA研修部，ESDグローバルアドバイザーと連携し，2月中旬のPTA研修会にて，本研究について保護者に説明を行い，ワークショップを実施する予定である。学校・保護者・地域の連携の下，「自ら気付き考え実行する児童」の育成を目指していきたい。